

新潟民医連に加盟する法人・事業所の取り組みを紹介します。 2024年9月2日(月) 発行者：宮野 大

# 入所さん ～念願かなう～

## 老健おぎの里の取り組み

### ビックスワンスタジアムに観戦へ

9/1付の「新潟日報」に、おぎの里の取り組みが掲載されました。  
難病の入所者さんの、「どうしてもスタジアムに行きたい」との願いを、職員が後押し、クラブ側の協力も得て実現しました。  
とても素晴らしい取り組みです。ぜひ、下段のURLより原文をご一読ください。

新潟日報 2024年(令和6年)9月1日(日曜日) 地域 12

渡辺さんの体に異変が現れたのは約4年前。手足に震えが出たほか、足がすくんで転ぶようになり、1年ほどで寝たきりになった。  
約20年前に親戚らと観戦して以降、アルビのとりこになった渡辺さん。病気になる前は、年間パスポートを購入してスタジアムに通っていた。「いつまで生きられるだろうか。渡辺さんは、費用は自分が負担するとして、スタジアムでの観戦を強く望んだ。おぎの里は「どうしても

女性は、新潟市秋葉区の介護老人保健施設「おぎの里」に入所し、2023年6月に多系統萎縮症と診断された渡辺光子さん(69)。全身の筋肉を動かす機能が低下するなどの神経疾患で、全国に約1万人の患者がいるとされる。新潟大脳研究所の石原智彦特任准教授(46)によると、原因や有効な治療法は分かっておらず、症状が進むにつれて食事や歩行、会話などが難しくなる。  
「観戦したい」と訴える渡辺さんの姿を動画にまとめ、23年6月にクラブ側に届けた。クラブによると、デンカビッグスワンで寝たきりの難病患者の観戦を受け入れた例は、ほとんどない。クラブ側は、空調などを備えた個室で見られるよう、スタジアム内の

## 「スタジアムへ」念願かなう

難病のアルビサポーター、渡辺さん

難病の「多系統萎縮症」で闘病中の女性が8月中旬、新潟市中央区のデンカビッグスワンスタジアムでサッカーJ1アルビレックス新潟の試合を観戦した。寝たきりで外出が困難な中、熱心なサポーターとして「どうしてもスタジアムに行きたい」との願いを施設職員らが後押し。「みんなが協力してくれて、とてもうれしかった」と感謝している。

### 発症1年ほどで寝たきりに 施設職員、クラブが後押し

#### 声援がよく聞こえる —とてもうれしかった



デンカビッグスワンスタジアムでアルビの試合を観戦する渡辺光子さん(新潟市中央区清五郎(おぎの里提供))

見に行きたい」と訴える渡辺さんの姿を動画にまとめ、23年6月にクラブ側に届けた。クラブによると、デンカビッグスワンで寝たきりの難病患者の観戦を受け入れた例は、ほとんどない。クラブ側は、空調などを備えた個室で見られるよう、スタジアム内の

ヘッドで過ごす渡辺さんは今夏、車椅子に乗る練習を重ねた。医師のほか施設職員11人が付き添い、渡辺さんは親戚と一緒に観戦した。「声援がよく聞こえる。渡辺さんにとって約4年ぶりとなるスタジアム。アルビは210で勝利し、リーグ戦では約3カ月ぶりのホームでの白星だった。



アルビグッズに囲まれたおぎの里の部屋で闘病生活を送る渡辺さん(新潟市秋葉区荻野町)

「やった!」。自分が見る試合で勝つてもらうことを願っていた渡辺さんは、親戚らと喜びを分かち合っている。渡辺さんはアルビについて「なごきはならない存在」と声を振り絞る。「だんだん体が動かなくなると、頑張る糧に、進行する病と向き合っている。」

